

Diary Studies を通した英語科授業研究の試み

— 現職教員を対象に —

深 沢 清 治

(1995年9月11日受理)

English Language Classroom Research through Diary Studies

— A Case of an Experienced English Teacher's Diary —

Seiji FUKAZAWA

A Diary study is a first-person account of a language learning or teaching experience, documented through regular, candid entries in a personal journal and then analyzed for recurring patterns or salient events (Bailey 1990). It can provide teachers and student teachers with excellent opportunities for their professional development.

In their previous article, Fukazawa and Nozawa (1995) analyzed the daily classroom reports written by 11 student teachers during their two-week teaching practice and suggested the importance of adopting this research method in in-service teacher education.

The present project aims to analyze a diary written by an experienced high school English teacher. Using the four classroom observation viewpoints developed in the previous study, his seven-days diary was analyzed, and salient and recursive entries were extracted and reviewed for further analysis. In consequence, the experienced teacher's diary was found to focus on more global aspects of classroom procedure and to be more concerned with problem-solving aspects than student teachers' diaries.

1 はじめに

英語科授業研究の近年の特徴として量的・質的研究の対立・統合の動き、Action Researchをはじめとする教室を出発点とした研究の現れを指摘することができる。これまでの授業研究の多くは、専門家による分析を出発点としたtop-downの形式を取るものであり、現職教師は常にその指摘を受容、消費する立場であった。たとえば、研究授業の場において、指導助言者が授業の評価を目的に必然的に一回限りで一方通行の授業研究の

形態がとられることが多かった。

これに対して、これからの授業研究は、英語教師自らがbottom-up的に自分の経験を基に考え、長期的に授業改善、自己発展をねらった「教室発」授業研究である。ここでは自らの授業に対する教師自身の内省(reflection)が鍵となる。このような流れをチャート化すれば次のようになるであろう。

top-down/external		bottom-up/internal
prescriptive/descriptive		reflective
researcher-initiated	→	teacher-initiated
evaluative		developmental
short-term		long-term

英語科授業研究の流れ

本研究は英語科教育実習における実習生の授業反省日誌の分析を行った深沢・野澤(1995)に続いて、ひとりの熟練英語教師による日記研究(Diary Studies)を通して、教師の授業観察観点の発見、授業活動における問題解決の方法の模索、など教師自らが授業改善の糸口を見いだす過程を追跡しながら、日記研究が今後の授業研究に与える示唆と今後の課題についての考察することを目的とする。

2. Reflective approach としての Diary study

Reflective approach とは、教師が教室での自分自身の授業を記録・観察し、データを収集し、それをもとに自らの授業を分析的かつ批判的に検討するための情報源として授業改善を図ろうとするアプローチである。Richards and Lockhart (1994)によれば、このアプローチは次の5つの前提から成り立っている。

- ① 経験のある教師は教育に関して幅広い知識を持っている
- ② 授業について自ら問うことで授業について多くのことを学ぶことができる
- ③ 授業で起こる多くのことは教師にはわからない
- ④ 経験だけでは教師としての伸長の基礎として不十分である
- ⑤ 批判的な内省を通して授業をより深く理解することができる

また、reflective approachには次のような方法がある。

- ① 教師の日記 (teaching journal, log, diary)
- ② 授業報告 (lesson report)
- ③ アンケート調査
- ④ 授業録画・録音

- ⑤ 他者授業観察および検討
 - ⑥ アクション・リサーチ (授業内の問題解決のための新しい取り組みをモニターしながらの行動プラン)
- (Bartlett 1990; Richards 1990; Richards and Lockhart 1994)

Diary study は、当初は第2言語習得過程を研究するための記録手段として learning diary が中心であったが、現在では teaching diary として教師前および現職教育プログラムで注目されている手法である(深沢・野澤 1995)。

3. 教育実習生の授業日誌をもとにした diary study

前研究において diary study の目的、方法、およびこれまでの研究の概略についてまとめた後、大学4年次生11名の2週間にわたる教育実習の反省日誌を分析した結果、教育実習生の授業観察視点は次の4つに集約された。

- A 指導過程(授業の流れ)に関する記述
復習から展開・整理にいたる指導過程全体の流れ、指導過程間のつながり、など
- B 生徒観(生徒への指導的評価、声掛け)に関する記述
生徒の言動、行動、反応、および生徒に対する指示、援助、評価など
- C 教材研究、教具に関する記述
言語材料、教科書など教材一般に対する指摘
- D 指導技術に関する記述
具体的な指導技術や教材・教具の使用に関する指摘

そして、実習生の日誌には次のような特徴が見られた。

- ① 指導過程・生徒観に関する記述よりも、教

材研究・指導技術に対するより徹視的な側面に視点が偏っている。

- ② 教育実習生の日誌の記述は次の3つのタイプに分類できる。

「～が～していた」 記述・感想型 (Describing 以下D型)

「なぜ～なったのか」分析・原因究明型 (Reasoning 以下R型)

「～すべきであった」問題解決型 (Problem-solving 以下P型)

また、実習期間中に記述の表現には変化が見られた。具体的には、はじめは生徒の学習困難点の指摘や他の教育実習生の授業行動の反省点などのように「～が～していた」とする記述・感想型 (D) の表現が多く、そしてそれらの原因についてわずかながら分析・原因究明型 (R) の表現が表れ、実習の後半からは指導技術において改善すべき点や代案を示す問題解決型 (P) へと変容しているのが見られた。

- ③ 実習開始当初に希薄であった生徒への指導的評価に関する記述が、最後には最も顕著な改善を見せた。

- ④ 教材研究は実習生自身の言語材料に関する理解の確認・深化を図るためのものとなり、既習事項とのつながりを考慮したり、質問を予想した上での生徒の側に立った教材研究となっていない。

- ⑤ 実習担当指導教官からの指導助言に柔軟に反応して修正を行い、個・グループとしての成長に大きな進歩が見られる。

これからの方向として、短期目標として教師前教育としての教育実習プログラムの中での授業実践の改善に加えて、より長期目標として実践経験のある教師が自らの授業を出発点として自己の授業観察の視点の特徴や指導上の関心事の意識化を通して、アクション・リサーチのサイクルの入り口で日記の研究的利用を促進することが課題となるであろう。

4. 熟練教師の授業記録による diary study¹⁾

日記研究を現職教育の中で取り入れる必要性を指摘した前研究を受けて、本研究においてはある

高等学校英語教師の協力を得て、熟練教師の授業日誌を基にした継続研究を行った。

- (1) 調査資料

広島県内の県立高校3年の1クラス(49名)での熟練教師による英語IIの授業を対象に1994年9月9日～19日の7時間分の授業記録を分析した。

- (2) 調査方法

前研究と同様に、授業観察視点や記述方法の事前設定は行わず、授業の感想をなるべく授業直後に自由記述したものを提出してもらった。また、記述対象のクラスはひとつに限定した。

- (3) 結果と考察

日記を日付順に並べると以下のようである。

—「誰でもわかる問題を出したつもりだが、(内容把握)問題の解答が学力中位くらいの生徒がわからなくて困っていた。解答は教科書にそのまま書いてあるのだが、…。短気なので答えをすぐに教えてしまったが、英文を順を追って解答を導き出せるようにすべきだった。短気は損気！」(9月5日)

—「多くの日本人高校生の場合は、英語で考え、英語で理解するのはほとんど絶望的状况である。日英の対比をよくさせながら、文の構造の正しい理解を一連の英文の中で捉えさせる訓練がさらに必要であろう。」(9月7日)

—「この段落は12行ほどであるが、少なくとも10～15は未知の単語が平均すればあるであろう。生徒のスキーマを広げるためには、内容理解にはいる前に重要表現の説明等をしたほうがよいであろう。方法を間違えると、パラグラフ・リーディングの指導がかえって生徒に大変いい加減な読みの指導をさせてしまい、逆に読解の力を落とす結果になる。」(9月9日)

—「知らない単語は辞書で調べたが、何が言いたいかさっぱりわからない上に、訳す際にはつながりがさっぱりわからないようだ。生徒が読めない原因は何なのか。要因は様々学習時間、語彙の不足、スキル、意欲等一であろうが、根気よく1つずつ検討していくしかないであろう。」(9月12日)

一「譲歩節の whether を説明しようとしたが、その前段階として名詞節の if すらほとんどの生徒が理解できていない。今まで生徒が理解していないのをだまし、だまし、そして私自身をだましながらか授業をしてきたようだ。今回が5回目の diary であるが、抜本的に自分の授業を変えていかなければ生徒の学力は付かないことに気づいてきた。」(9月13日)

一「Reading の指導として、よく T or F を実施するが、教師も生徒も答えの正解のみに気をとられてしまっている。なぜそういう答えになるかということ、すなわち process に重点を置いた指導に転換していく必要があるのではなからうか。段落毎の内容面を図式化して、なぜそういう結論が導き出されるのかということも指導していかなければならないと思う。」(9月16日)

分析の結果、次のような特徴が見られた。

- ① 内容把握の前に基本的な文法事項から確認をすること、正解結果の確認よりも理解の過程に注目し、そのための手だての必要性を指摘していることから、このクラスではこの授業者の関心事が一貫して読解指導にあることがわかる。
- ② 先述の授業観察視点のうち、内容把握を援助するための interaction や学習困難点の指摘など、A 指導過程、B 生徒との関わりに関する記述がほとんどで、C 教材研究や D 指導技術の側面の指摘は極めて少ない。この点は、視点 C、D の頻度が高い実習生の反応とは異なる点である。
- ③ 日記の記述のスタイルに2週間で変化が見られる。まず、前半の週(9月7日)では記述・感想(D)から問題解決(P)に至るスタイルが主である。「多くの日本人高校生の場合、英語で考え、英語で理解するのはほとんど絶望的状况である(D)。日英語の対比をよくさせながら、文の構造の正しい理解を一連の英文の中で捉えさせる訓練がさらに必要であろう(P)。」(D→P)

これに対して、後半の週(9月13日)では記述・感想(D)、分析・原因究明(R)、問題解決(P)を含んでいる。

「譲歩節の whether を説明しようとしたが、その前段階として名詞節の if すらほとんどの生徒が理解できていない(D)。今まで生徒が理解していないのをだまし、だまし、そして私自身をだましながらか授業をしてきたようだ(R)。今回が5回目の diary であるが、抜本的に自分の授業を変えていかなければ生徒の学力は付かないことに気づいてきた(P)。」(D→R→P)

実習生の日記が問題点の指摘が中心であるのに対し、熟練教師の記述には単なる印象の羅列に終わらず、それに対する問題解決の手だてを模索しているのがうかがわれる。さらに、途中から現状の問題点を引き起こすに至った原因についても考えられている。この差は、生徒理解や指導経験の豊かさに起因するものと考えられる。

これらの変化が、単に2週間に渡って日記をつけたことによるものとは判断できない。しかしながら、一つの授業について自己観察を続けることによって、その印象や観察結果の記録に留まらず、学習者の困難点の原因究明、さらには生徒の実態に合わせた支援のための手法を考えるきっかけとなっていることは教師内での変化とみなすことができるであろう。この後、自らの問題解決策を実践に移し、具体的な試行錯誤を重ねることは授業改善のためのアクション・リサーチの入り口として重要であろう。

5. 授業研究への示唆と今後の課題

本稿は、現職英語教員による日記研究を通じた授業研究の結果報告である。以下では、日記研究の持つ今後の授業研究への示唆と課題について考察する。

- ① 教育実習を中心とした英語科教師教育プログラムにおける日記研究の活用

教育実践力は大学のカリキュラムを通して完成されるのではなく、その後も継続して伸長するものであり、教育実習という実践への入門期において自らの授業を内省する機会はその後の長い英語教育実践の自己点検の手段として不可欠であろう。従来の日誌という形式で行われる授業記録は、単なる記述にとどめるのではなく、内省の機会としてフィードバックされることが必要であろう。

② 日記研究のための時間の確保

短期的には時間のかかる無駄とも思える日記をつけるという作業を有意義なものにするためには、長期的な変化の有効性を検証しなければならない。そのためには、授業後に一定の時間を確保することが必要となってくる。「書く」という作業に時間をとられなければ、テープ・レコーダによる音声メモにより記録を残すことも可能であろう。

③ 英語教師間の連携

日記研究を継続的に行うことは、個人研究だけではなく難しい場合が多い。継続するためには、記述の視点の検証や解決策の糸口の発見を得ることが必要であり、そのためには教師間の協力・連携による共同研究の可能性を模索して行かねばならない。

本研究は、最少人数の熟練教師による日記研究であるため、実習生との比較という手法を取った。今後、さらに多くの日記データを集めていく必要がある。さらに、個人内の変化が長期的に確認できれば、より信頼性のあるデータとなるであろう。

【注】

- 1) 本研究にあたって、広島県立呉昭和高等学校（広島大学大学院学校教育研究科）の中井俊宏先生による研究レポートの一部を引用させていただいた。この場を借りて研究協力に感謝申し上げたい。また、本稿は第25回中国地区英語教育学会・岡山大会で口頭発表したものである。

REFERENCES

Alderson, J. (ed.) 1985. *Evaluation*. Pergamon.

Bailey, K. 1990. The use of diary studies in teacher education programs. In J. C. Richards and D. Nunan (eds.), pp. 215–226.

Bartlett, L. 1990. Teacher development through reflective teaching. In J. C. Richards and D. Nunan (eds.), pp. 202–214.

Jarvis, J. 1992. Using diaries for teacher reflection on in-service courses. *ELTJ*, 46, 2, 133–143.

McDonough, J. 1994. A teacher looks at teachers' diaries. *ELTJ*, 48, 1, 57–65.

Murphy-O'Dwyer, L. 1985. Diary studies as a method for evaluating teacher training. In J. Alderson (ed.), pp. 97–128.

Richards, J. C. and D. Nunan (eds.) 1990. *Second Language Teacher Education*. Cambridge University Press.

Richards, J. et al. 1992. *Longman Dictionary of Language Teaching and Applied Linguistics*. New edition. Longman.

Richards, J. C. and C. Lockhart 1994. *Reflective Teaching in Second Language Classrooms*. Cambridge University Press.

Thornbury, S. 1991. Watching the whites of their eyes: the use of teaching-practice logs. *ELTJ*, 45, 2, 140–146.

Wallace, M. J. 1991. *Training Foreign Language Teachers: A Reflective Approach*. Cambridge University press.

深沢清治・野澤久美 1995. 「英語科教育実習における Diary Studies の試み」『広島大学学校教育学部紀要』第17巻、47–53.